

あいさつがくれた宝物

西中学校 3年
高須 優芽

いつからだろう、私は自然にあいさつができるようになっていた。そしてあいさつをしない人を見るとなぜしないのか不思議に思う自分がいた。時々、「あいさつ運動をするのは面倒臭い」と言う声を聞くことがある。たしかにそうだ。私も面倒臭いと思うことがある。しかし最近になって私はあいさつをしたことで得られた事が増えた。その体験談を紹介する。

この間、「おじさん、おばさん運動」という行事があった。「おじさん、おばさん運動」とは、地域の人達が校門の前に立ちあいさつをする行事だ。私はその運動に参加している近所のおばさんに会い、運動の目的を二つ聞いた。まず一つ目は、中学生と高齢者の交流の場を設けるということだ。交流をすることで何か起こった時に信頼しあえる関係をつくることができるからだ。先月、私が家の鍵を忘れてしまい家に入れずに困っていた。その時にいつもあいさつを交わしている近所の人と一緒に待っていてくれた。私は、今まであいさつを交わしてきたからこそ信頼できたなと心から実感した。二つ目は、あいさつ運動をすると、不審者が近づきにくいということだ。あいさつは人と人がお互に行うコミュニケーションなので、自然に人が人を見ることになる。そうすると、人がいつでも見守っていることを示すことができるので結果、不審者が近づきにくくなる。このことを聞いた私はあいさつは、ただ交流するだけでなく、地域の安全も確保できるので、大切だと思った。

私は小学校一年生の頃、とても人見知りで大きな声であいさつをしたり人の目を見て話すことができなかった。しかし、近所の人達が積極的にあいさつをしてくれたことで、小学校六年生の頃には大きな声で人の目を見てあいさつができるようになった。さらに今

では自分から話しかけられるようになり、近所の人との仲も好調だ。

中学校一年生になった私は、初めて会った人にもあいさつをするようになった。その様子を見ていた母が「知らない人に気安くあいさつをしないほうがいいんじゃない?」「もし優芽に何かあっても助けてあげられないことがあるかもしれないよ」と心配してくれた。その時に初めてあいさつをする危険性を知った。それから怖くなり、近所の人ですらあいさつができなくなってしまった。最初のうちはそれでいいと思っていた。しかし時間が経つにつれて近所の人に「元気ないね」と言われるようになった。それなのにその言葉さえも無視してしまった。今、思い返せば本当に人として最低なことをしていたと思う。けれど近所の人はいさつをし続けてくれた。どんな時も声をかけ続けてくれた。近所の人はいさつは人の心のあたたかさを伝えることができることを知っていたのかもしれない。

私は自分自身に問いかけた。あいさつをしない人生を歩んでいくのか、自分は本当は『あいさつ』という行為に対してどう思っているのか。だした答えは『あいさつをする』だ。理由は簡単であいさつをしていなかった期間、なんとなく気分が落ちこんで、モヤモヤしていたからだ。そのせいか、また人の目を見て話せなくなってしまい、うつむいて歩いていたために自分に自信がなくなってしまったのだ。そんな自分を変えるために、私は再びあいさつを始めた。最初は恥ずかしかったけれどだんだんと慣れてきた。普段のなにげない日常もまるで自分の心に花が咲いているかのように楽しくなってきた。あまりにも凄かったので私は『あいさつ運動』についてのアンケートを調べてみた。すると、平成二十九年度朝来小PTAの集計では、人から笑

顔であいさつをされるとうれしく思うという質問に対し、とてもそう思う、少しそう思うと答えた人は合わせて九十パーセントだった。つまり、あいさつをすると自然と気持ちが前向きになるのだ。だから私もあいさつをし始めてから色々な人に「性格が明るくなったね」と言われるようになった。

このようにあいさつをすることで得られる事がたくさんある。時にあいさつをすることで危険な目にあうかもしれない。しかしそれ以上に毎日が楽しくなり新しい自分をつくりあげていくかもしれない。だから新しい自分をつくる一ページとしてあいさつを試みるのはどうだろうか。あいさつには言葉では表せないすごい力がある。私に人生を楽しく過ごすための宝物をくれた『あいさつ』には感謝してもきれないくらいだ。今まで何かの理由であいさつをすることに抵抗があった人は、一度でもいいからあいさつを試みてほしい。きっといくつもの新しい『宝物』が増えるだろう。